The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	宗教性の諸次元とその規定因 : キリスト教を事例に
Author(s)	松谷, 満
Citation	年報人間科学. 2002, 23-2, p. 175-192
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12475
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

宗教性の諸次元とその規定因

――キリスト教を事例に――

松谷　満

〈要旨〉

本論の目的は、(1)キリスト教信者の宗教性がどのような次元から構成されるのか(2)それらの諸次元と年齢や性別などの社会的属性との関連はどうなっているのかを探ることにある。欧米の研究では宗教性を一次元ではなく多次元で捉えることにより、信者個々人の内的構造をより的確に描き出す試みがおこなわれている。本論はそのような研究を日本での事例に適用する一試論である。

本論の分析では日本のキリスト教信者(プロテスタント)についてのデータが用いられている。以下の結果は、このデータの計量的分析によって得られたものである。

(1)「キリスト教調査」について因子分析をおこない、「内発的志向性」「外発的志向性」および「宗教的行動」の三因子が抽出された。「内発的志向性」と「宗教的行動」には高い相関があったが、「外発的志向性」については関連が見られなかった。

(2)これら三因子と社会的属性との関連は、因子ごとにさまざまであった。具体的には、「内発的志向性」は親の宗教および入信時期と「外発的志向性」は年齢および学歴と、そして「宗教的行動」は年齢および入信時期とそれぞれ関連があった。

以上の結果から、宗教性を多次元的な尺度によって測定することの有効性があらためて確認された。今後は、宗教性の諸次元が社会意識に対してどのような影響を及ぼしているのかを明らかにすることが課題となる。

キーワード

宗教性の諸次元／社会的属性／因子分析／日本のキリスト教／宗教的志向性

1　問題の所在

欧米の宗教社会学において、計量的手法を用いた実証研究は、多くの蓄積がある。日本においても質問紙による宗教調査は少なくない。しかし、それらは主に単純集計やクロス集計を用いるにとどまっており、それ以上の、多変量解析といわれる分析にまで踏み込んだものは必ずしも多くない。近年では金児(1997)、杉山(1993)などが、そのような分析を試みているが、コンピュータによる統計解析手法の進展にもかかわらず、この分野は停滞気味である。

質問紙による宗教調査においては、被験者である個々人が程度の差はあれ、宗教を意識的に捉えていることが先行要件となる。しかし、日本の場合、アメリカなどとは異なり、一般的な人々の表層に宗教的なものが表出する頻度はそれほど多くない。したがって、ランダム・サンプリングによる総合調査や心理学などでよくなされる大学生調査などは、宗教をトピックとした場合、分析にはさまざまな限界がつきまとうのである。これも日本において、宗教の計量研究が盛んとならない一因であろう。

したがって、日本では、それらの調査よりもまず、宗教教団の信者調査に多くの比重が向けられるべきである。宗教社会学の場合、フィールドワークなどにより、個別宗教教団の実態を観察するといった人類学・民俗学的アプローチが主流である。しかし、計量研究にも個々人の宗教意識や宗教行動の内的構造を年齢や性別などの社会的属性との関連も含めつつ、数量的に提示することが可能であるなどの利点をそなえており、その意義は見直されるべきである。計量調査と非計量的調査を対象や問題意識によって上手く使い分ける、補完的な活用がより重視されるのが望ましいといえるだろう。

本論は、信者個々人の宗教性[1]を取り扱った欧米の先行研究を踏まえつつ、日本での事例に適用する一試論である。この分野での第一人者、スタークとグロックは、個人の宗教性についての基本的な問いを以下の三点に集約している。

1 What is the nature of religious commitment? 宗教的コミットメントの性質はどのようなものか

2 What are the social and psychological sources of religious commitment? 宗教的コミットメントをもたらす社会心理学的要因は何か

3 What are the social and psychological consequences of religious commitment? 宗教的コミットメントがもたらす社会心理学的な帰結はどのようなものか(Stark and Glock 1968: 1-6)[2]。

これはつまり、宗教は人々の生活に多様な形で影響を及ぼしている(3の問い)、と同時に、その宗教性は、それを規定する社会的要因との関連で捉えられるべき(2の問い)、という主張なのである。

本論は日本での一事例として、キリスト教信者の質問紙調査をおこない、得られたデータについて分析を試みたものである。欧米での研究対象は多くがキリスト教信者であるため、そこでの成果を今

回の分析にもさまざまな形で適用することが可能であるだろう。

本論が取り組む課題は、宗教性がどのような次元から構成されているかを明らかにするとともに、それが性別や年齢などの社会的属性によってどの程度規定されているのかを探ることである。宗教性を単一尺度ではなく多次元的に捉え、かつ、社会的属性との関連を見ることによって、信者の宗教性の特徴がよりはっきりと描き出されるであろう。また、それがもたらす社会心理学的な帰結についての分析は今後の課題となる。本論では、そのような分析をも想定した諸次元の尺度構成をおこなう。

本論の構成は以下、①先行研究の整理、②オリジナル・データによる分析、③議論となる。

2　宗教の計量的研究

2・1 宗教性の諸次元

欧米における宗教の計量的研究は、宗教意識や宗教行動をどのように測定し、さまざまな研究に適用できるかという関心から始まっている。その際、「単一尺度による測定は宗教を一面でしか捉えていない」(金児 1997: 81-82)という難点があるため、宗教性のさまざまな側面を多元的に捉える手法が、多くの研究者によって模索されてきた。そこには大きく分けて二つの流れがある。

ひとつは志向性に関する研究であり、主に動機の面から、人々の信仰を分類するものである。オルポートは動機づけのありかたについて、内発的志向性と外発的志向性の二つの類型を考えた。彼によると、「外発的に動機づけられた人は宗教を利用するが、内発的に動機づけられた人は宗教を実践する」(Allport 1967: 434)というのである。言い換えれば、内発的志向性は宗教それ自体が目的であるが、外発的志向性は宗教を何らかの(世俗的な利益などを得るための)手段として捉える見方である。この類型については、例えば、偏見に関して、内発的志向性の持ち主は偏見が少なく、外発的志向性の持ち主は逆に偏見を強く抱く(Gorsuch and Aleshire 1974)という知見が得られている。

その後の研究はオルポートの類型を修正・発展させる形で展開した。特に「内発-外発」という構成概念の妥当性やそれを測定する尺度の信頼性に関して検討が続けられている。例えばバトソンらは、探求あるいは探索的な志向性(Quest Dimension)というものをあらたに付け加え、実際の調査に適用している(Batson and Schoenrade 1991)。「内発-外発」の枠組では、内発的志向性が暗に望ましいものとされる傾向があった。しかし、内発的志向性が実際には盲目的に宗教を信じるような態度をも含むものではないかとの疑問が提示され、「探求」の次元が近年、取り入れられているのである。

もうひとつの流れは一次元の包括的な尺度から、意識や行動の次元など多次元的な尺度の構成を目指した一連の研究である。この流れにおいて、基本的かつ多くの研究者たちに利用されているのは、グロックによる信念・行動・体験・知識・結果の五次元である(Glock 1962)。

その後、特に七〇～八〇年代において、グロックとスタークに続く研究が次々と生み出されてきた。そのなかで代表的なのはキングとハントらの一連の調査である。彼らの研究は常に多くの質問項目を用い、グロックの五次元を上回る、さらに多くの次元の抽出を試みたものである。キングとハントは質問項目を修正したり、対象をさまざまな範囲に広げたりして、精力的に調査を繰り返した(King and Hunt 1972, 1975)。その後、さらにそれらを修正したり、新たな対象によって再調査をおこなったりする研究があらわれた[3]。しかし、このような宗教性の諸次元を因子分析によって描き出す研究は、基本的にはどれもグロックの研究に類似するものであり、それに集約されるものがほとんどであった。

本論では宗教的志向性と宗教的次元というこの二つの流れをともに組み込んだ次元の構成を目指すことにする。

2・2　宗教性と社会的属性

それでは、宗教性と年齢や性別などの社会的属性とのあいだの関連については、どのような知見が得られてきたのであろうか。

性別　性別に関しては、女性は男性よりも宗教性が強いというのが一般的な見方である。日本における世論調査でも、ほとんどの項目で女性に宗教性が強くあらわれている(石井 1997: 90)。その理由としては、「女性らしさ」に規定された現世利益的傾向(NHK放送世論調査所編 1984: 59)などをはじめとする様々な要因が複合的に絡み合っているものと解釈されている。アメリカにおいてはジェンダーと宗教についても豊富な研究がある[4]が、それはもっぱら女性の宗教性の強さの原因をさぐるものであり、女性の宗教性の強さはすでに前提とされている。

年齢　年齢に関しては、一般的に高齢であるほど宗教性も強いようである。石井は既存の世論調査を振り返り、加齢とともに伝統的な宗教行動への関わりを強めるのが日本人の基本パターンであるという見方を示している(石井 1997: 70-86)。欧米における諸研究でも同様の知見が見られるが、それが単に「加齢」の効果であるかは疑問視されている。金児のレヴューによると、年齢と宗教性との関連は、時代的背景を反映した世代間格差に起因するという研究結果も出ているのである(金児 1997: 128-129)。この点に関して、林と鈴木は、年齢と宗教性との関連を「加齢効果」「時代効果」「コーホート効果」に分けてコーホート分析を試みており興味深い。日本・アメリカ・オランダの三カ国のデータを用いて分析した結果、日本(項目: 宗教を信じるか)においては「加齢効果」が、アメリカ(項目: 礼拝出席)では「コーホート効果」が、そして、オランダ(項目: 宗教的なものへの加入)においては「時代効果」がそれぞれ強く影響を及ぼしていることが明らかになっている(林・鈴木 1986: 128-139)。

今回の分析においては、年齢と宗教性の特定の次元に関連があったとして、それが「加齢」によるのか、「世代」間格差であるのかは、一回限りの調査であるため判別がつかない。したがって、解釈の際には十分な注意が必要とされる。

学歴　一般に高学歴であるほど、宗教的なコミットメントは弱いと

するのが、常識的な見解である。そこには教育によって合理的・批判的思考が育成されるという推測がある。例えば、モルモン教徒の宗教行動の規定因についての分析では、学歴が特に大きな負の効果を持っていることが明らかになっている(Cornwall 1989)。しかし、一般に信じられているほど、学歴の効果は明瞭ではない(石井 1997: 86-89)。特定の宗教行動については、知的水準が高いはずの大学生のほうが熱心である(金児 1997: 20)という結果も出ているのである。

親の影響　個人の宗教性に及ぼされる親の影響は比較的明確である。親にとって宗教が重要であるほど、その子どもに及ぼす親の宗教的影響は強い(金児 1997: 254)というのが既存の研究において共通する知見である。アメリカでも、大多数は親と同一の宗教に帰属し、両親が同一の信仰を持っている場合、影響はさらに強いということが言われてきた(Beit-Hallahmi and Argyle 1997)。また、両親の宗教的コミットメントの強さが、子の宗教性に与える影響は非常に強い(Kelly and De Graaf 1997)ということも実証されている。

入信時期あるいは入信後年数　特に欧米のキリスト教や、日本での仏教などの場合、入信後年数というものはあまり意味をなさない。なぜならば、そこにははっきりと個人の意思により「入信」するという契機が存在しないためである。しかし、今回取り扱う日本のキリスト教や新宗教などの場合、個々人がある段階において関わりをはじめるというケースが多いため、これを問うことには意味がある。入信後年数については、杉山が新宗教教団の崇教真光を対象にした調査で分析に用いている。その結果、特に入信後の経歴が長い人ほど行動面が活発であるということが分かっている(杉山 1993)。

本論ではこの五つの属性について、宗教性の諸次元との関連を検証するのであるが、もう一つ貴重な先行研究について参照しておく。

ミラーは、「日本人の国民性」調査のデータサンプルをもとに属性と宗教性との関連について分析をおこなっているが、そこでの結果は先述の知見をうまく整理した形になっている。宗教文化および歴史的・社会的背景の相違にもかかわらず、日本での調査は、アメリカにおける宗教調査と非常に類似点が多いということが明らかになった。具体的には①意識・行動双方における年齢と宗教性との関連②女性の宗教性の強さ③学歴・収入などのその他の変数は関連が弱い、という点において日米の傾向に共通性が見られた(Miller 1992)のである。

今回の分析は、これらの知見がキリスト教信者についても当てはまるかどうかということに焦点が当てられる。既存の研究においては、特に日本において、宗教性は単一尺度かもしくは個別の質問項目ごとに測定され、属性との関連が問われることが多かった。しかし、本論は宗教性を多次元的に捉え、それぞれの次元と属性との関連を探るものである。もし、次元ごとの属性との関連が異なるのであれば、宗教性を多次元的に見ることの有効性があらためて確証されることになろう。

また、既存の研究の多くは、アメリカ人におけるキリスト教、日本人における民俗宗教性や宗教的習俗など、もともと、親和性が高い組み合わせを研究対象としたものである。それでは今回のように、

日本のキリスト教信者という文化的には異質な宗教を受容した人々についてはどのような結果が導き出されるのであろうか。

3　分析

3・1　調査の概要および分析に用いるデータ

分析に用いるデータは、二〇〇〇年に独自に調査した「キリスト教徒の宗教性と社会意識に関する調査」(以下「キリスト教調査」)データである。「キリスト教調査」は阪神地域都市部の教会九ヶ所において実施された。調査票は、質問総数四一問、一三ページにわたるものを作成した。質問項目は主にアメリカの総合的社会調査General Social Surveys(GSS)と同一のものを、宗教と社会意識に関連する項目について取り上げた[5]。GSSは二〇〇〇年まで計二三回にもわたって行われてきた大規模な調査であり、そのデータは、社会学に限らずさまざまな分野の研究に多数用いられているものである。

対象とした教会の教派は長老・改革派系二教会、メソジスト系二教会、組合派系二教会、ペンテコステ派系一教会そしてカトリック二教会である。いずれも日曜の礼拝(ミサ)に平均して一〇〇人以上出席する教会を対象とした。調査票の配布は、主に、日曜日の礼拝においてその出席者に配る方法を取った。対象者が調査票を持ち帰り、後日調査者宛に返送するという形式を取った。計九一〇票のアンケート用紙を配布し、回収数は四九三票、回収率は54.2%であった。なお、本論文では、サンプル数が少ないため、ペンテコステ派およびカトリックは除外することとした。それ以外の教派は戦前における主流三教派に属するものであり、いずれも非常に長い歴史を持つ教会である。そのような意味において、本論文のサンプルは、日本におけるプロテスタント教派のある種、理念型的なものと捉えることも可能である。本論文において用いるデータサンプルは三二一である。

3・2　属性構成についての確認

キリスト教信者サンプルの属性構成を検討しておく。本論文で用いる性別・年齢・学歴・親の宗教および入信時期について表1に度数分布を提示した。

性別では、女性の比率が高いことが分かる。一般的に新宗教などにおいても女性の比率が高い教団が多く、この結果は妥当なところであろう。年齢構成については、二〇～五〇代が少ない代わりに、六〇歳以上が65.1%と高齢者が多いという特徴が見られる。年齢に関しても、一般的に高齢者に宗教の信者が多いということがよく言われる。「キリスト教調査」でもそれは当てはまるようである。

ところが、学歴については、他の宗教教団とはやや異なる様相を呈している。日本のキリスト教は主に、都市部の中産階級、特に知識人層から構成されている、というのが属性的特徴とされてきた(古屋・大木 1989: 116)。本調査データは、それをはっきりと裏づけているように見える。学歴に関しては、71.8%が短大・大卒以上と回答している。これだけでも非常な高学歴層ということが分かるが、

表1　社会的属性の分布

性別	男	女	有効回答者数
	39.3	**60.7**	321

年齢	20～30代	40～50代	60代	70代以上	
	10.6	24.3	**32.1**	**33.0**	321

学歴	初等	中等	高等	
	1.9	26.3	**71.8**	319

家の宗教	キリスト教	他宗教	
	46.8	53.2	312

入信時期	- 1944	1945 - 64	1965 - 84	1985 -	
	8.7	**45.8**	26.2	19.3	321

*数値はパーセントを示している。

*学歴分類については「日本人の国民性」調査を参考にした（統計数理研究所1999）。

年齢を考慮するとなおその偏りがはっきりとするのである。

親の宗教については、両親のうち少なくともどちらかがキリスト教信者である場合には、「キリスト教」、そうでない場合には「他宗教」と分類した。両親ともにキリスト教信者であるのは46.8%、両親ともが他宗教あるいは特に信仰する宗教がないと答えた者が、53.2%である。ほぼ半数が、少なくとも両親のどちらかがキリスト教信者であるということになる。

入信時期に関しては、戦後前半期の一九四五－六四年が現在でも45.8%と最も多い。この時期は俗に「キリスト教ブーム」とされている時期である。その後の入信者はやや減少傾向にあるといえる。

以上をまとめると、「キリスト教調査」データは、女性が比較的多く、高齢層が中心であり、にもかかわらず高学歴である。彼らの多くは戦後の前半期に入信しており、入信後三〇年以上を経過した者も少なくない。そして親の宗教についてはその半数近くが「キリスト教」であった。戦後前半期に主に高学歴層が入信した「インテリ層の宗教」としての日本のキリスト教(プロテスタント)の姿が如実にあらわれているといえよう。

3・3　宗教性の諸次元についての質問項目

宗教性の諸次元については、先に見たように、そのより明確な理解をめぐってさまざまな測定方法や分析方法による、豊富な研究の蓄積がある。具体的には信仰についての態度・意識や宗教的な行動へのコミットメントを計量的方法によって類型化するというのが、

表 2　質問文の概略

変数名	質問項目の情報
宗教的信念(GSS1988)	
聖書解釈	「聖書解釈についてあなたの意見にもっとも近いもの」 1=「聖書は神の言葉を正確にしるしたものであり、それぞれの言葉は一字一句字義どおりにとられなければならない」2=「聖書は神の意志が吹き込まれたものであるが、その言葉は一字一句字義どおりにとらなければならない、というものではない」3=「聖書は神の言葉というよりむしろ、人間によって記録された寓話、伝説、歴史、道徳的な教訓などからなる古代の文献である」
信仰確信	「あなたの信仰はどれくらい確かなものですか」 1=「確信に満ちている」から7=「疑念が混ざっている」までの7段階
聖書の影響	「聖書が生活内での選択に与える影響」 1=「非常に重要」から5=「あまり重要でない」までの5段階
説教の影響	「教会の説教が生活内での選択に与える影響」 1=「非常に重要」から5=「あまり重要でない」までの5段階
疑問なしに信じる	「よいクリスチャンであるためには、何の疑問も持たずに信じることが重要か」 1=「非常に重要」から5=「あまり重要でない」までの5段階
神を信じるか	「神についての信仰で最も近いもの」 1=「神の存在に何の疑いもない」から6=「神を信じていない」までの6段階(調査時は数値を逆転させていた)
神を近くに感じるか	「神をどれくらい近くに感じているか」 1=「非常に近く」から5=「神は信じていない」までの5段階
宗教的行動(GSS1988)	
礼拝出席	「どの程度礼拝に出席しているか」 1=「週に2回以上」から9=「全く行かない」までの9段階
教会活動	「所属している教会の何らかの活動に参加しているか」 1=「はい」2=「いいえ」
祈りの頻度	「普段どの程度祈りをしているか」 1=「毎日何回か」から6=「まったくしない」までの6段階
聖書を読む頻度	「どのくらいの頻度で聖書を読んでいるか」 1=「毎日何回か」から6=「まったく読まない」までの6段階
伝道	「キリスト教徒でない方に、イエス・キリストを信じて救い主として受け入れるように、働きかけたことはあるか」1=「はい」2=「いいえ」
外発的志向性(Batson and Schoenrade 1991)*すべて1=「賛成」から5=「反対」までの5段階	
祈りの動機	「祈りは幸せや安らかな生活を手に入れるためにする」
教会に行く理由	「教会に行く理由の一つは人間的な交わりが落ち着く場所を提供してくれるから」
教会と人間関係	「教会はよい人間関係を作るには最適」
信仰よりも大切なこと	「キリスト教を信じているが、生活にはそれよりも大切なことがたくさんある」
内発的志向性(Batson and Schoenrade 1991)*すべて1=「賛成」から5=「反対」までの5段階	
人生の意味についての教え	「宗教は、人生の意味について多くのことを教えてくれるので、わたしにとってとりわけ大切だ」
信仰の生活との関わり	「私の信仰は、わたし自身の生活とたいへん密接にかかわりあっている」
伝道の努力	「教会員ならば、キリスト教を自分以外のすべての人にたいしても広めようと、いっしょうけんめい努めるべき」

これまでの基本的な方法的手続きであった。本論もこの流れを踏まえ、宗教性を独立しつつも相互に関連しながら存在している諸次元の総合と見るという前提のもと、調査を企画した。

「キリスト教調査」においては、今後の分析の方向性との兼ね合いで、諸次元の構成に関して以下の点についても考慮した。ひとつには、日米キリスト教の比較可能性を射程に入れておくこと、そしてもうひとつには、「宗教性の諸次元がもたらす社会心理学的帰結」、特に価値観や社会意識との関連を明らかにしうるような尺度構成をめざすことである。前者については、GSSなどの既存の調査から質問項目を抜粋し、それをできる限り忠実に翻訳することで質問文を作成した。後者については、諸次元の因子構成がなるべく簡潔に示されるように項目を選択した。これについては後で説明する。簡潔さを心がけたのは、質問紙調査に不慣れな被調査者に、あまりにも膨大な質問に回答をさせるのは適切でないと判断したためでもある。本調査では、因子分析を施すことを想定し、宗教に関する質問項目を一九項目設けた。そのなかで、宗教的次元に関するものとして設けたのが一二項目、宗教的志向性に関するものが七項目である。質問文のおおよその内容とスケールを表2に示した

今回の調査に際しては、以下のような因子を想定して質問項目を取入れた。まず、GSSの質問項目からは、宗教的次元として「信念」および「行動」が抽出されると仮定し、それぞれ七項目と五項目を採用した。グロックの枠組ではほかに「知識」「体験」「結果」があげられていたが、「知識」「体験」については何らかの「宗教性の諸次元がもたらす社会心理学的帰結」が予測され難く、今回は除外した。「結果」については他の次元とは位相が異なるものと判断し、分析から省いている。

次に宗教的志向性に関する質問項目についてであるが、これに関連するものはGSSにおいては用いられていない。本調査では、先行研究におけるその尺度の重要性を考慮し、それらを測定する質問項目を取入れた。具体的には、バトソンらが調査に際して用いたものから、因子の構成に際して負荷量が高かったものを「内発的志向性」について三項目、「外発的志向性」について四項目を採用した(Batson and Schoenrade 1991)。探求的な志向性を測定することも考えたが、質問項目数や被調査者への負担なども考慮して今回は除外した。

3・4　宗教性の諸次元の構成

宗教に関する項目すべてに回答があったケースについて最尤法(プロマックス斜交解)によって因子分析をおこなった。一般的には、宗教的次元と宗教的志向性は別々に因子分析をおこなうのであるが、今回は試みに一つにまとめて分析をしている。金児は浄土真宗の僧侶と門徒代表とを調査した際に、そこから抽出された「真宗信仰性」および「宗教的実践性」を「内発的志向性」に、「民俗宗教性」は「外発的志向性」に分類されるものとして捉えた(金児 1997: 119)。その分類が妥当であるならば、例えば「内発的志向性」と「信念」「行動」を測定する尺度は、一つにまとめて因子分析をおこなった場合、

因子間の相関が高くなるか、同一因子に包含されるであろう。今回の分析では、宗教的次元と宗教的志向性のあいだの関連についても検討する。

また、直交解でなく斜交解を求めたのは、「宗教意識の因子分析によって抽出される因子は、互いに似通ったものであり、その因子の間に相関がないという仮定をおくことは、現実的でない」(川端1989: 39)ためである。分析の過程で、どの因子にたいしても因子負荷が高くなかった項目は除外するなどの細かい修正を施した結果、三つの因子が抽出された。結果を表3に示している。

予測していたのは四つの因子であったが、実際には三つの因子にまとめられた。以下、それぞれの因子を構成する項目について簡単に見ていく。

ひとつめの因子を構成するのは「聖書の影響」や「神をどれくらい近くに感じているか」などの「信念」の測定項目と「内発的志向性」の測定項目であった「信仰の生活との関わり」である。二つの概念が混在するものになったが、これは先の金児の推測どおりであるし、もともと宗教的志向性を「内発-外発」の枠組で構成した場合、「内発的志向性」は単純に宗教心の強さを示すことになりがちである。したがってこの因子はさほどおかしなものではない。ここに含まれる六項目の質問文を吟味してもやはり、それはより一般的な宗教心の強さをあらわしているように考えられる。寄与率が28%と高いことからも、そのように考えるのが妥当である。したがってこの因子は金児の「真宗信仰性」に倣い、「キリスト教信仰性」と解釈しても

表3　因子分析

	内発的志向性	外発的志向性	宗教的行動	共通性
信仰確信	**.720**	.087	-.118	.449
聖書の影響	**.837**	-.107	-.017	.699
説教の影響	**.596**	.107	.035	.389
神を信じるか	**-.686**	.022	-.004	.474
神を近くに感じているか	**.772**	-.017	-.104	.524
信仰の生活との関わり	**.596**	-.058	.128	.453
祈りの動機	-.074	**.517**	.011	.274
教会に行く理由	-.072	**.911**	-.033	.834
教会と人間関係	.174	**.741**	.059	.599
礼拝出席	-.143	-.007	**.833**	.591
教会活動	-.011	.035	**.465**	.215
祈りの頻度	.304	.032	**.358**	.336
聖書を読む頻度	.329	-.019	**.412**	.417
			共通性合計	6.254

因子間相関	内発的志向性	外発的志向性	宗教的行動
内発的志向性	1.000	-.006	.517*
外発的志向性	-.006	1.000	.091
宗教行動	.517*	.091	1.000

*因子抽出法: 最尤法　回転法: Kaiserの正規化を伴うﾌﾟﾛﾏｯｸｽ法
*相関係数は1%水準で有意。
*.35以上の因子負荷量が見られた項目を太字で示した。

よいのであるが、他の因子との兼ね合いも考慮してとりあえず「内発的志向性」と称しておくことにしたい。除外されはしたが、「内発的志向性」の他の二項目もどちらかといえばこの因子に対して高い因子負荷があったため、この名称にするのはあながち的外れとはいえないだろう。

ふたつめの因子は、一項目が除外されたものの、「祈りの動機」「教会に行く理由」「教会と人間関係」からなり、「外発的志向性」の因子と考えてよさそうである。寄与率は14%であった。この因子は「人間的な交わり」や「よい人間関係」「安らかな生活」などを重視する態度指標であり、「神との関係」だけでなく、人間的な部分にも重きをおくものである。「外発的志向性」は宗教を手段として捉えているというネガティブな意味付与がされがちであるが、今回抽出された因子はそのような側面は比較的弱い。「宗教よりも大切なことがある」という項目がここに含まれなかったことからも、そう解釈して差し支えないであろう。

最後の因子は、「礼拝出席」「教会活動」「祈りの頻度」「聖書を読む頻度」からなる。寄与率は6%とほかの因子に比べて低めである。この因子には特に「礼拝出席」の因子負荷が.833と高かった。この因子は「宗教的行動」の因子として問題はないが、「私的-公的」でいえばより公的な側面が強い行動因子であると考えられる。なお、行動の私的な側面といえる「祈りの頻度」「聖書を読む頻度」は、「内発的志向性」にもそれぞれ.304と.329のやや高い因子負荷があった。「内発的志向性」が、必然的に「祈りの頻度」「聖書を読む頻度」を多くする役割をも担っていることのあらわれであろう。

表3では因子間相関もあわせて示している。「内発的志向性」と「宗教的行動」とのあいだに.517とかなり高い相関があるのが目につく。先の金児の見解は妥当であることが確認された。その一方で、「外発的志向性」は他の因子とほとんど相関が見られない。このことから、「外発的志向性」は、他の宗教性とはかなり異質な次元の宗教性であることが分かる。また、「内発-外発」間に負の相関がないことは注目すべきである。この二類型はしばしば単純化され、内発的志向性＝宗教性強い／外発的志向性＝宗教性弱い、という一次元的な見方がなされる。しかし、結果からは、内発的志向性も外発的志向性もともに強いという信者もいれば、その逆に、どちらの志向性においても弱いという信者もいるであろうということが推測される。信者個々人においてこの二つの志向性はさまざまな形で保持されているようである。

次に、ここで得られた宗教性の三因子と社会的属性とのあいだにどのような関連があるか見ていく。そのことによってまた、それぞれの因子の持つ特徴が、より明らかとなるであろう。

3・5　宗教性の諸次元と社会的属性

宗教性の諸次元と社会的属性のあいだの関連はどうなっているのだろうか。先の三因子の因子得点を従属変数として、分散分析をおこなった。独立変数は性別・年齢・学歴・親の宗教・入信時期である。なお、因子得点が低いほうが、宗教性が強いことを示している。

表4から明らかなように、宗教性の三因子それぞれが、異なる属性と関連していることが分かる。この結果からは、宗教性を単一の次元ではなく、いくつかの次元に分類したうえで分析することで、その内的構造がより明瞭に描き出される、という多元的尺度の意義が確認されたといえよう。

それでは具体的には、属性と宗教性とのあいだにはどのような関連があるのだろうか。以下、各因子ごとにその属性との関連についてみていく。

まず、「内発的志向性」については、今回の因子構成において、一般的な宗教心の強さを測定する指標であると推測されたのであるが、分散分析の結果、1%水準で入信時期と親の宗教が有意であることが分かった。親の宗教については、親もまたキリスト教信者であるほうが「内発的志向性」が強いという結果になった。また、入信時期との関連では、戦後に限定すると、入信時期が早い人々のほうが、「内発的志向性」も高いことが明らかとなった。

次に、「外発的志向性」であるが、「内発的志向性」とは異なる要因が影響を及ぼしていることが明らかとなった。具体的には、年齢と学歴である。年齢が高くなるほどこの志向性が強く、学歴が高いほうが弱くなるという結果であるが、有意水準は10%であり、それほどはっきりとした関連ではない。

そして、「宗教的行動」については年齢と入信時期が有意であった。特に年齢は5%水準で有意であり、年齢が高いほど、「宗教的行動」についても多いことが分かった。入信時期については10%水準での

表4　社会的属性別の因子得点平均値

	内発的志向性	外発的志向性	宗教的行動	N
性別	n.s.	n.s.	n.s.	
年齢	n.s.	F=2.475 P<0.1	F=2.915 p<0.05	280
30代以下		.250	.385	34
40～50代		.154	-.004	66
60代		-.037	-.023	88
70代以上		**-.167**	**-.117**	92
学歴	n.s.	F=3.733 p<0.1	n.s.	279
初等・中等		**-.175**		73
高等		.069		206
親の宗教	F=9.560 p<0.01	n.s.	n.s.	272
キリスト教	**-.178**			130
他宗教	.166			142
入信時期	F=3.954 p<0.01	n.s.	F=2.514 p<0.1	280
- 1944	.054		**-.118**	22
1945 - 64	**-.202**		-.108	126
1965 - 84	.134		.023	75
1985 -	.249		.254	57

*n.s.は有意ではなかった分析である。

有意であるが、「内発的志向性」に対するのと同じく、入信時期が早いほど、「宗教的行動」も活発である。

全体を見ると、先行研究においては差があるとされていた性別において有意な差異がまったく見られないことに気づく。これについては、日本のキリスト教の特徴であるのか、熱心な信者内においては男女差が見られないということなのか、それとも今回のサンプルの問題であるのか、断定はできない。なぜこのような結果になったのかということについては、今後の調査における課題としたい。

4　議論

本論では、宗教に関する項目について、宗教性の諸次元を抽出すべく、因子分析を試みた。その結果、三因子が抽出され、それぞれ「内発的志向性」「外発的志向性」「宗教的行動」と命名した。当初想定していた四次元は抽出されなかったが、欧米の宗教性に関する一連の研究と傾向においては類似するものであった。また、「信念」の測定指標を組み込んだ「内発的志向性」と「宗教的行動」の間には有意な高い相関が見られた。金児(1997)の指摘のように、「信念」「行動」は「内発的志向性」に分類される、あるいは近似したものであるということが確認された。一方の「外発的志向性」については他の因子と相関が見られなかった。

ここで再度、それぞれの因子について、それを規定する諸要因との関連も含め、議論をおこないたい。

まずは「内発的志向性」である。グロックによる類型では「信念」「および「体験」がこれに該当するものであった。今回のように、質問項目を絞り込み、かつ志向性と次元とを一括して分析した場合には、それらは一つの因子として、宗教心の強さをあらわす因子となる。

「内発的志向性」は、親の宗教がキリスト教である場合に強くあらわれる。このことはこれまでの知見とも一致し、当たり前のことのように思える。しかし、今回のサンプルについては注意が必要である。なぜなら、調査対象は礼拝出席者であるため、熱心な信者についての調査であるからである。そのなかにおいては、親がキリスト教信者である者は、みずから信仰を選び取ったという側面が弱いために、他宗教からキリスト教の信仰に入ったものよりも、熱心さに欠けるという仮説も成り立つのではないか。逆にみずからの意志で信仰をはじめた人々のほうが、宗教心が強いのではないか。しかし結果は、今回のデータにおいても、既存の研究と同様に、親が子の宗教的社会化に与える影響が大きいということが確認された。このことは、信仰の継承というものが後の世代の宗教心の育成において非常に重要であることを意味するものといえよう。

さらに「入信時期」が早いほうが、この志向性が強くなる傾向があった。その反面、既存の研究では関連があるとされた年齢については有意な関連が見出されなかった。したがって、入信時期と「内発的志向性」との関連は、「加齢」などによるものではなく、入信後年数が長いことによる宗教的社会化の進展によるものと考えられる

のである。もちろん、入信後年数の長さは、継続した熱心な信者であることのあらわれと見ることも可能であり、それだけ宗教心が強いというのも当然といえば当然の結果である。ただし、その場合、最も入信後年数が長い世代が、戦後前半期の世代と比べて「内発的志向性」が高くないことは解釈と矛盾する。このことから、入信後年数以外に入信時期自体が何らかの影響力をもっていると推測することができる。先に見たように、戦後前半期は、「キリスト教ブーム」の時期とされ、現在でもその時期の入信者が多い。この時期は戦後民主化の波に乗じ、キリスト教にとってもっとも勢いのあった時代だったのである。そのような「キリスト教ブーム」世代の宗教心が特に強いという今回の結果が何を意味するのかは現段階では定かではない。しかし、宗教集団内における世代間での宗教性の相違というものは、その集団自体の変容を物語るものであり、注目に値するといえる。

つづいて、「外発的志向性」にうつる。「外発的志向性」は「内発的志向性」との対比においてどちらかというと現世重視のネガティブなものとされがちであった。しかし、今回の結果においては、「外発的志向性」は「内発的志向性」と負の相関が見られず、一次元的な尺度としては捉えられないことが明らかとなった。すなわち、「宗教心はもちろん大事だが、それとともに「人間的な側面」も大事である」という意識のありようも可能なのである。

「外発的志向性」はその規定因において、「内発的志向性」と全く異なっていた。入信時期や親の宗教とこの因子は何ら関係がなかった。したがってこの因子は、少なくとも、宗教的社会化により徐々に育成されるといった類いのものではないのである。

「外発的志向性」と関連があった属性は年齢と学歴である。関連があるとはいえ、10%水準で有意であるものなのでそれほど強い関連ではなさそうである。年齢層が高くなるほど、その志向性が強くなっているが、入信時期とは何の関連もないことから、「加齢」による影響という側面が強そうである。年齢と外発的志向性の関連については、少し意味合いは違うが、同様の知見が得られた研究がある。川端は特定の宗教信徒、神社参詣者、一般的な人々とさまざまな対象について宗教性の因子分析を施し、「現世主義」と名づけられた因子については、どの対象においても年齢が高いほど強くあらわることを明らかにしている(川端 1989)。「現世主義」と「外発的志向性」は同一の因子とはいえないものの、どちらも世俗的な関心をより重視するような因子である。また「現世主義」についても宗教性の構造の核心となるような因子、例えば「汎神論的信仰心」とは別個に存在する概念であるとされており、今回の「外発的志向性」の結果と符合する。川端は「現世主義」を日本文化の特徴としてあげられるものである(川端 1989: 42)としているが、そのような特徴がキリスト教信者にも何らかの形で反映しているということなのかもしれない。

既存の研究は年齢が宗教意識全般と関連があるとしていた。しかし、今回の結果においては「内発的志向性」と年齢との関連がみられなかった。推測の域を出ないのであるが、年齢は特に、その国固

有の民俗宗教性であるとか、どの国にも共通する人々の宗教に対する志向性などの場合、影響を及ぼすのではないだろうか。つまり、年齢を重ねていくうちに社会によって無意識的に「社会化」される宗教的要素が「加齢」の効果として表出するものと推測できるのである。このように想定することにより、日本のキリスト教信者においては、固有の民俗宗教性とは異質な要素がたぶんに含まれる「内発的志向性」については「加齢」の影響がなかったとの説明が可能となるのである。

また、高学歴層はこの志向が弱いことが明らかとなったが、それについてはどのような解釈が可能であろうか。今回のサンプルの属性構成から明らかなように、日本のキリスト教は少なくとも戦後の前半期までは、主に高学歴層を魅了するものがあったということがいえる。一方でまた、高学歴層は宗教に対しては概して批判的であるというのが一般的な見方である。高学歴層のキリスト教信者においては、「内発的志向性」に含まれるような中心的な教義部分については、受け容れるが、「外発的志向性」などについては、本質から外れた要素であるがために、あまり積極的でないということがいえるのではないだろうか。

「宗教的行動」については年齢と入信時期が有意であった。行動面の関連については、先に触れた杉山の研究が同様の知見を得ている。

杉山は、崇教真光の信徒にたいして、因子分析により諸次元を抽出した後、性別・年齢・入信後年数を要因とした共分散分析をおこなっている。その結果、行動と年齢・入信後年数とのあいだに有意な関連があることが分かった(杉山 1993)。入信後年数と入信時期は同じ指標と考えてよいから、両調査は行動面については、まったく同様の結果が出たといってよい。年齢や入信時期については、それが「加齢」の効果か、「世代」の効果か、それとも「継続的な信仰」の効果なのか判別が難しい。ただ、「内発的志向性」の場合とは異なり、特定の世代において数値が低いということはないため、おそらく「加齢」および「継続的な信仰」が複合的な効果を「宗教的行動」にたいして与えているのであろう。また、年齢・入信時期(入信後年数)と宗教的行動との関連は、他宗教に関してもより広く該当することなのかもしれない。今後の調査が注目されるところである。

本論は、欧米における宗教の計量的研究の成果を援用した一試論であった。キリスト教を事例として取り上げた結果、特徴的な三つの因子が抽出されたといえる。しかも、それらの因子ごとに異なる関連が見出された。スタークとグロックは、宗教的次元それぞれについて、教派ごとに、ある次元では宗教性が強く、ある次元では宗教性が弱いという側面を描き出した(Stark and Glock 1968)。そのような結論を導き出すために、彼らは宗教性を多次元的に見ることを提唱したのであった。金児もまた浄土真宗の僧侶と門徒代表を調査して、宗教性の諸次元のうち「真宗信仰性」については住職のほうが強く、逆に「民俗宗教性」については門徒代表のほうが強いという多元的尺度ならではの結果を見出している(金児 1997: 149)。本論においても同様に、一次元ではなく、内部の諸次元それぞれに注目

する必要性が、明らかとなった。

そもそも、何を規準とした宗教性か、との疑問に対し、一次元の尺度ではそれがあいまいである。また、個別の質問項目ごとでは、それぞれがどのような概念を測定した指標であるのか、その指標は妥当であるのかという疑問に十分に対処しきれない。宗教性を諸次元に尺度化することにより、宗教性自体の構造、その社会的属性との関連、そして、それが他の領域に及ぼす影響などの複雑な構造についての理解がさらに促進されるであろう。宗教性についての計量的アプローチはこのような問題に対してきわめて有効である。今後、日本における宗教集団の信者の意識・行動を比較検討するうえでも、同様の調査がより盛んにおこなわれていくべきである。

本論において残された課題は、「結果の次元」すなわち「宗教性による社会心理学的帰結」を宗教性の諸次元との関連において明らかにすることである。これについては別稿で論じる。

注

(1) 宗教性religiosityについてはその概念定義をめぐってさまざまな議論が絶えないが、本論では、一般的に宗教的なものとして認知されている行動および意識をまとめて宗教性という概念のもとに扱うこととする。

(2) 訳は筆者の作成による。

(3) 例えばヒルティらの一連の研究など(Hilty 1988)。

(4) 詳しくは、バイト・ハラーミとアージャイルによるレヴューを参照のこと(Beit-Hallahmi and Argyle 1997)。

(5) 作成に際しては、その調査の内容や結果が詳細にわたって公開されているGSSホームページを参照した。(http://www.icpsr.umich.edu/GSS)

文献

Allport, G. W. and J. M. Ross, 1967, "Personal Religious Orientation and Prejudice," *Journal of Personality and Social Psychology*, 5: 432-443.

Batson, C. Daniel and Patricia Schoenrade, 1991, "Measuring Religion as Quest," *Journal for the Scientific Study of Religion*, 30: 430-447.

Beit-Hallahmi, Benjamin and Michael Argyle, 1997, *Psychology of Religious Behavior, Belief and Experience*, New York: Routledge.

Cornwall, Marie, 1989, "The Determinants of Religious Behavior: A Theoretical Model and Empirical Test," *Social Forces*, 68: 572-592.

古屋安雄・大木英夫 1989『日本の神学』ヨルダン社

Glock, Charles Y., 1962, "On the Study of Religious Commitment." *Religious Education Research Supplement*, 57: 98-110.

Gorsuch, R. L. and D. Aleshire, 1974, "Christian Faith and Ethnic Prejudice: A Review and Interpretation of Research," *Journal for the Scientific Study of Religion*, 13: 281-307.

林知己夫・鈴木達三 1986『社会調査と数量化——国際比較におけるデータ解析』岩波書店

Hilty, Dale M., "1988, Religious Belief, Participation and Consequences: An Exploratory and Confirmatory Analysis," *Journal for the Scientific Study of Religion*, 27: 243-259.

石井研士 1997『データブック 現代日本人の宗教』新曜社

金児暁嗣 1997『日本人の宗教性』新曜社
川端亮 1989「宗教意識の構造——千里ニュータウンの調査結果から」『ソシオロジ』34: 37-63
Kelly Jonathan and Nan Dirk De Graaf, 1997, "National Context, Parental Socialization, and Religious Belief: Results from 15 Nations," *American Sociological Review*, 62:639-59.
King, Morton B. and Richard A. Hunt, 1972, "Measuring the Religious Variable: Replication, 1972," *Journal for the Scientific Study of Religion*, 11: 240-51.
——1975, "Measuring the Religious Variable: National Replication," *Journal for the Scientific Study of Religion*, 14: 13-22.
Miller, Alan S., 1992, "Conventional Religious Behavior in Modern Japan: A Service Industry Perspective," *Journal for the Scientific Study of Religion*, 31: 207-214.
NHK放送世論調査所編 1984『日本人の宗教意識』日本放送出版協会
Stark, Rodney and Charles Y. Glock, 1968, *American Piety: the Nature of Religious Commitment*, Berkeley: University of California Press.
杉山幸子 1993「宗教心の多元性——性、年齢、入信後年数による検討」『社会心理学研究』9: 13-21
統計数理研究所 1999『国民性の研究 第一〇次全国調査』統計数理研究所研究リポート83

Dimensions of Religiosity and Social Determinants on Each Dimension: Evidence from [Japanese Christian Survey]

MATSUTANI Mitsuru

The purposes of this paper are to examine (1) how dimensions of religiosity are identified in membership of Japanese Christianity and (2) the relation between these dimensions and social demographic characteristics such as age and sex. In the scientific study of religion in Europe and the United States, It has been suggested that multi-dimensions of religiosity are more useful to understand internal structure of church member than only one religiosity scale. This paper applies multi-dimensional approach to a case in Japan.

In analysis of this paper, data collected from members of Protestant church in Japan were used. The following knowledge was acquired as a result of quantitative analysis of this data.

(1) Using factor analysis in "Christianity Survey", three factors ("Intrinsic religious orientation", "Extrinsic religious orientation" and "Religious practice") are extracted. "Intrinsic religious orientation" is positively correlated with "Religious practice". But, it is uncorrelated with "Extrinsic religious orientation"

(2) Social demographic characteristics have different effects on each dimension of religiosity. Parents' religion and the time that is converted have positive effects on "Intrinsic religious orientation". Age and education have effects on "Extrinsic religious orientation". And age and the time that is converted have positive effects on "Religious practice".

From the above result, the validity of measuring religiosity with multi-dimension-measure was accepted. Further analysis should be to examine how and what dimensions of religiosity have positive/negative effects on social attitude.

Key Words

dimensions of religiosity / social demographic characteristics / factor analysis / Christianity in Japan / religious orientation